

令和 7 年度（2025 年度）
京都市立芸術大学 美術学部

入 学 試 験 問 題

京都市立芸術大学

Kyoto City University of Arts — founded in 1880 —

目 次

描写	1
描写対象物（画像）	2
色彩	3
色彩解答用材料（画像）	4
立体	5
立体解答用材料（画像）	7
小論文	9
出題の意図、評価のポイント、受験生へのメッセージ （描写・色彩・立体・小論文）	13

2025年度 実技試験問題

科目 描写

時間 9時10分～13時10分

与えられた紙袋、植物の葉、麻紐、LED ライトの特性を活かして、
台紙上に構成し、下記の条件に従い、
答案用紙に鉛筆で、描写しなさい。

●条 件

1. 与えられたすべての対象物は、台紙上に構成すること。
2. LED ライトは強点灯にすること。
3. LED ライトは紙袋の中に入れて平置きし、本体が見えないようにすること。
4. LED ライト本体は描かないこと。
5. 紙袋、植物の葉は、折ったり、丸めたりしてもよいが、切る、破る、分解すると
いった破損をともしない加工はしないこと。
6. 麻紐は、紐を引き出してもよいが、切断はしないこと。

【支給されるもの】

紙袋1袋、植物の葉1枚、麻紐1巻、LED ライト1個、答案用紙1枚、台紙1枚、
カラーカード1枚

【使用してよいもの】

カルトン(56 cm×40cm 以上)、カルトン用クリップ、鉛筆(色鉛筆は除く)、
消しゴム(練り消しゴムを含む)、羽ぼうき(又はダスティングブラシ)、
カッターナイフ(鉛筆削り用)、ボールペン(カラーカード用)

【注意】

1. 答案用紙は縦横、裏表どちらを使用しても構いません。
2. 答案用紙と台紙は同じものです。どちらを答案用紙にしてもかまいません。
3. 【支給されるもの】と【使用してよいもの】以外は机の上に置かないこと。
4. 【支給されるもの】の補充、交換は行いませんが、LED ライトが点灯しない場合は、すみやかに申し出ること。
5. 解答(作業)は着席したまま行い、他の受験生の迷惑とにならないようにすること。
6. 忘れた用具の貸し出しはしません。
7. 受験生同士の用具の貸し借りは認めません。
8. 試験終了15分前に、指示に従いカラーカードを答案に貼りつけること。

★(その他の注意事項) LED ライトの光源を見続けられないこと。

【描写：対象物】



2025 年度 実技試験問題

科目 色彩

時間 15時00分～18時00分

下記の条件に従い、与えられた印刷物と絵具による表現で

「き^{こう}っ抗」をテーマに画面構成しなさい。

*「き^{こう}っ抗」とは、勢力・力がほぼ等しく、相対抗して優劣のないこと。(広辞苑第7版)

● 条 件

1. 印刷物は、4～8枚に切り分けて、全て使用すること。
2. 印刷物を切るときは、手でちぎったりせず、ハサミまたはカッターナイフを使用すること。
3. 切り分けた印刷物は、答案画面から浮いたりせず、平たくしっかりとスティックのりで貼り付けること。
4. 印刷物を貼り付けるときは、重ねても、重ねなくても構わないが、答案用紙からはみ出さないこと。
5. 印刷物の裏面は使用しないこと。また印刷物の上には絵具を塗らないこと。
6. 画面内で印刷物が貼られていないところは全て絵具を塗ること。

【支給されるもの】

答案用紙1枚、印刷物1枚、構想用紙3枚、灰色ボール紙1枚、スティックのり1個、カラーカード1枚

【使用してよいもの】

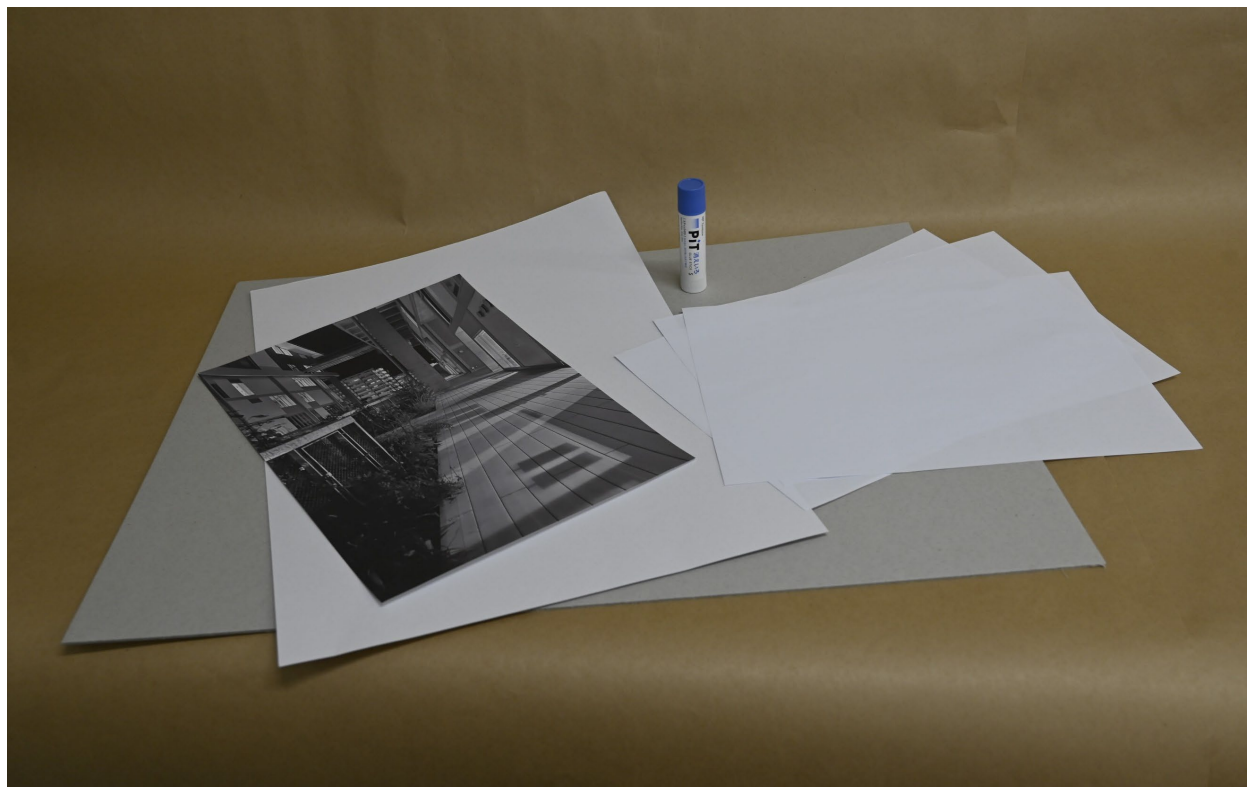
透明水彩絵具、不透明水彩絵具、パレット（又は絵具皿）、筆、筆洗、雑巾、直定規（60cm以内、目盛付き）、分度器、コンパス、鉛筆、消しゴム（練り消しゴムを含む）、はさみ、カッターナイフ、カルトン（56cm×40cm以上）、カルトン用クリップ、ボールペン（カラーカード用）

※不透明水彩絵具とは、ポスターカラー、グアッシュ等をさします。

【注意】

1. 答案用紙は、裏表・縦横どちらを使用してもよい。
2. カッターナイフを使う際は、灰色ボール紙の上で作業すること。
3. 【支給されるもの】と【使用してよいもの】以外は机の上に置かないこと。
4. 【支給されるもの】の補充は行いません。
5. 解答時間終了後に剥がれた印刷物の復旧はできません。
6. 試験終了15分前に、指示に従いカラーカードを答案用紙に貼り付けること。
7. 試験中は着席し、他の受験生の迷惑とならないようにすること。
8. 忘れた用具の貸し出しは行いません。
9. 受験生同士の用具の貸し借りは認めません。
10. 机の上の模造紙が汚れたり破れたりした場合でも、張り替え、交換は行いません。

【色彩：解答用材料】



2025年度 実技試験問題

科目 立体

時間 9時20分～12時20分

与えられたクッション材を使って「^{ふか}深い^{みぞ}溝」を表しなさい。

●条 件

1. 答案は答案用台(35cm×35cm)をはみ出さず、また、高さ 35cm からはみ出さないこと。
2. 接着や形状をかたちづくる為の材料としてタコ糸、両面テープを使用すること。
3. 支給された制作用材料と制作補助材料を用いて十分な強度を持たせること。
4. 答案用台および答案には描画・着色しないこと。
5. 答案用台は答案を接着・固定する以外は加工しないこと。
6. 答案は答案用台の白色面側にしっかりと接着・固定すること。（試験終了後、各自移動用カバーをかぶせ、答案を持ち、答案提出場所まで移動します。）
7. 支給された制作用材料は、使い切らなくても良い。

【支給されるもの】

制作用材料 : クッション材 1 枚 (30 cm×100 cm×1 cm)

制作補助材料 : タコ糸 1 巻、両面テープ 1 個

答案用台 : 白色段ボール 1 枚 (35cm×35cm×0.5 cm)

制作支援用品 : 灰色ボール紙 1 枚 (作業用)、上質紙 3 枚 (アイデアスケッチ用)

カラーカード : 1 枚

移動用カバー : 茶色段ボール製箱 1 個、カバー固定用テープ 2 枚

【使用してよいもの】

鉛筆、消しゴム（練り消しゴムを含む）、カッターナイフ、はさみ、分度器、

直定規（60cm 以内、目盛付き）、三角定規（30cm のもの 1 組）、コンパス、

雑巾、粘土へら、ラジオペンチ（刃付のもの）、ボールペン（カラーカード記入用）

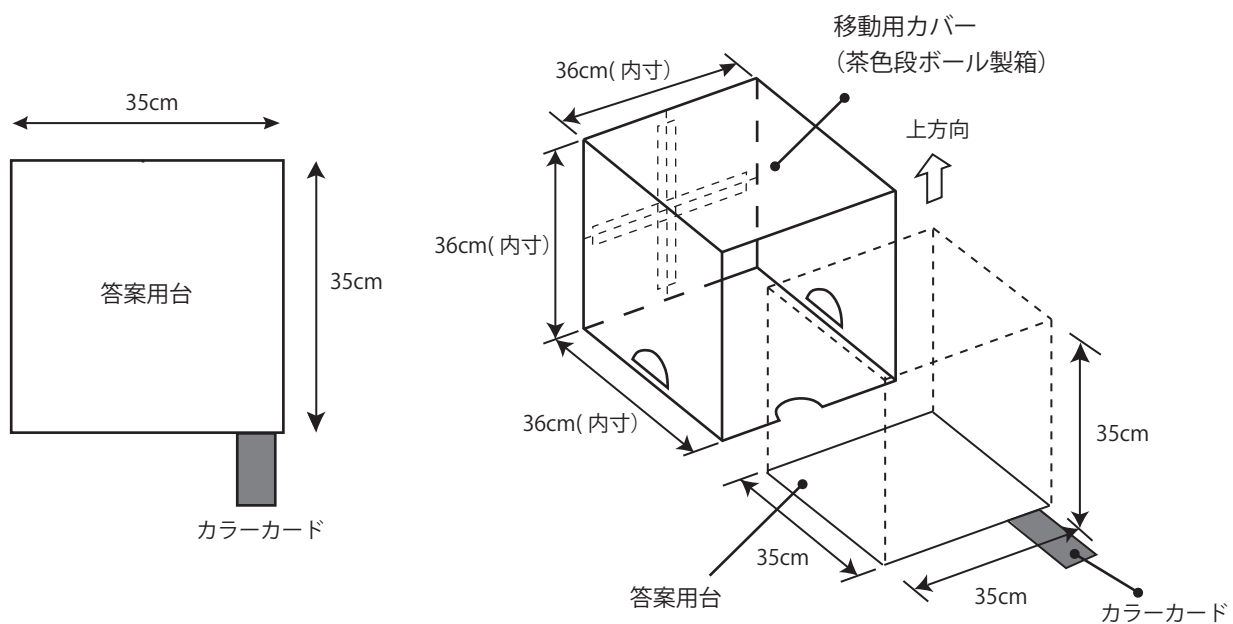
【注 意】

1. 上質紙 3 枚は、アイデアスケッチ用として使用すること。
2. 作業は支給された灰色ボール紙の上で行うこと。
3. 怪我のないように慎重に作業すること。
4. 【支給されるもの】と【使用してよいもの】以外は机の上に置かないこと。
5. 【支給されるもの】の補充は行いません。
6. 試験終了 15 分前に、監督者の指示に従い、カラーカードを答案用台の右前端に貼りつけること。
7. 試験中は着席し、他の受験生の迷惑とならないようにすること。
8. 忘れた用具の貸し出しはしません。
9. 受験生同士の用具の貸し借りは認めません。
10. 机の上の模造紙が汚れたり破れたりした場合でも、張り替え、交換は行いません。

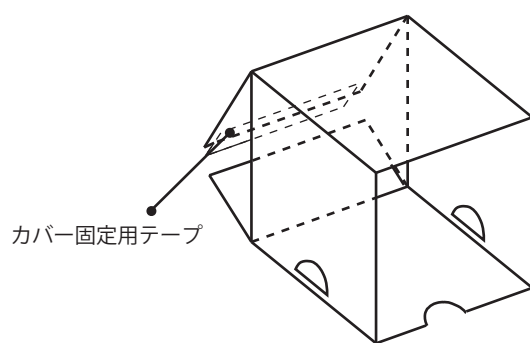
【立体：解答用材料】



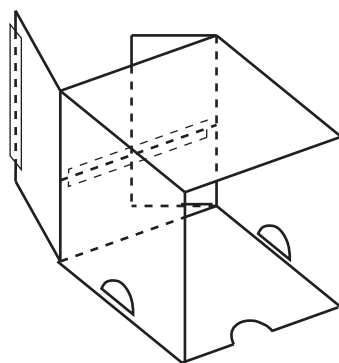
移動用カバー 組み立て説明



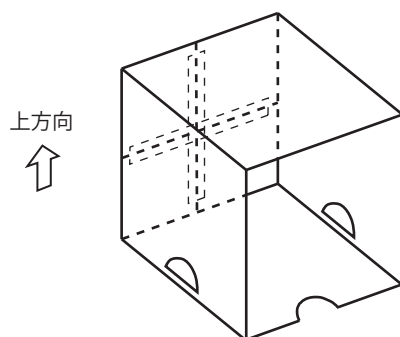
移動用カバー（茶色段ボール製箱）組み立て順序 ① ② ③



- ① フタは上下を先に閉じる
カバー固定用テープを外側に貼る



- ② 左右を閉じる
カバー固定用テープを外側に貼る



- ③ 移動用カバー完成

二〇二五年度 総合芸術学科入学試験問題
科目 小論文(二〇〇点満点)
時間 十五時〇〇分～十七時〇〇分

別紙の問題文は、芦原義信『街並みの美学』から抜き出したものである。この文章を読んで、以下の設問に答えなさい。

設問一 この文章の主旨を三〇〇字以内で要約しなさい。

(六〇点)

設問二 文章に「そんな所からか、わが国でも最近とみに低層集合住宅に関する関心や研究がふえてきた」とあります。この文章の流れから、そうした研究において検討の対象となると思われる具体例や類例(直接的に低層集合住宅ではないが、その考察に資する例)を挙げ、あなたがそれらを挙げた理由を述べなさい。

(六〇点)

設問三 この文章を読んだうえで、冒頭の「小さなもののなかに大きなものをよみとる」ということの意義や可能性について、芸術をはじめとする創造行為や鑑賞行為における具体例を挙げながら、あなたの考えを述べなさい。

(八〇点)

《注意》

- ・答案用紙に受験番号・氏名をボールペンで記入してください。
- ・答えはすべて配布された答案用紙に記入してください。
- ・答案用紙は横書きで使用してください。
- ・答案用紙の罫線に沿って答え、最初に設問番号を明記してください。
- ・答案用紙は、罫線のある面だけを使用し、裏面は使用しないでください。
- ・追加の答案用紙が必要な場合は、試験監督に申し出てください。その場合、追加の答案用紙にも受験番号と氏名を明記し、1枚目の答案用紙の最後に「2枚目に続く」と書いてください。さらに答案用紙を追加した時も「3枚目に続く」と記すなど、以下同様にしてください。

【出典】芦原義信『街並みの美学』（岩波現代文庫、一九九〇年）一五五―一六四頁

芦原義信『街並みの美学』（岩波現代文庫、一九九〇年、初版一九七九年）

「詩人はつねに小さなもののなかに大きなものをよみとろうと身がまえている」という。この言葉はなかなか含蓄のある意味をもっているように思われる。大きな空間には、大きな空間にしか存在しない価値があるが、一方、小さな空間——狭い空間ではない——にもはかりしれない魅力が存在するのである。

それでは、小さなものとは一体なんなのであるか。それは小犬であっても、小猫であっても、盆栽の櫛けやきであっても、ミニアチュアの人形であってもかまわない。第一に小さなものは掌中の珠のように可愛らしい。小さなものには未来性があり夢とロマンがあるのである。また、大きなものとの対比において、見るものをイマージュの世界にさそいこみ、さらにその内部にくりひろげられる内密性をさぐろうとするきっかけをはらんでいる。

フランスの哲学者ガストン・バシユールが言うように、小さいものは大きいものであるということとを弁証法的に確かめようとすれば、小さいものの世界で想像力を発揮して、夢み、考えるよりしかたがない。例えば、テーブルの上の一つの林檎りんごがあるとすると。人々はまるで子供らしい想像と思うかも知れないが、もしその林檎の中に入ってみたとしたらどうであろうか。そこにはなんと広々とした内的空間が存在することであろうか、また、何と静謐せいひつさがあるのであるか。想像の世界こそは、人々を真の安らぎに導き、やがては満ち足りた幸福感を与えてくれる。小さな空間に入ることとは、自分自身を何分の一かに縮小するという想像力が必要である。自分自身を縮小することができれば、人々はひとりで創造の世界へと導かれるであろう。自分自身を拡大してみてもなかなかイマージュの世界には入れない。大きなものから小さなものを想像することは困難である。そこにこそ「小さな空間」の小さいことの意義があるのである。

「中略」

それでは、実際の建築空間において、この「小さな空間」にはどのような意味があるのであるか。わが国のように工業化がすすめばすすむほど、人口は急速に都市に集中する。今日のような高度工業社会では都市の整備が間に合わなくなり、ついには無秩序な巨大都市が成立せざるをえなくなるのである。都市は本来人口が集中することによって人と人とのめぐりあいをたかめ、その便利さ、スピード感、匿名性のようなものがこの上もない都市の魅力となっていた。しかしながら、世界的に見て、大都市があまりに急速に発展してきたので無秩序な過大都市となり、自らコントロールできる範囲を逸脱し、非人間化と精神的荒廃の道をたどりはじめたとも思われる。押しあいへしあう人々の雑踏、寸刻を争って走り抜ける自動車群、大声でわめきたてるラウド・スピーカー等は、われわれ人間をいためつける。都市のなかに渦巻くエネルギーのものがすごから、われわれは巨大な無秩序さに対するアレルギーをもつようにすらなってきたとも考えられる。また、建築学の分野でも、大きな空間のみならず小さな空間に関する研究が関心をもたれるようになってきたが、ここに都市の住いの中になんとか安らぎと人間性を回復したいという現代人の悲願のようなものを感じるのである。都市に住む一人一人の住民にとって、大都市の住宅地こそは

都心の賑わいとは対照的に、ますます静謐な空間であり安らぎの空間であるべきだからである。

都市は、本来、コミュニティからプライヴァシーにいたる段階的秩序によって成立していると考えられるが、都市が巨大化し雑踏化すればするほど、小さな静かな空間が必要となるであろう。小さいとは、必ずしも空間の狭さを意味するのではなく、茶室や盆栽などに見られるように、小さいことよつてのみ、積極的に実現される価値を認めることであり、空間が大きいために実現されない内密の豊かさを「小さな空間」の中に見いだすことなのである。

それでは、「小さな空間」によつて意味されるものはなんであろうか。まず第一に、個人的（パーソナル）であり、静寂であり、想像的であり、詩的であり、人間的であることである。それはいづれをとつても大都市の雑踏が、匿名的であり、喧噪であり、現実的であり、非人間的であることと対比されるであろう。太陽が東から昇つて万物活動の朝となり、西に沈んで安息の夜となるように、人々は昼間の大きな空間での活動から解放されて、夜のしじまに「小さな空間」に停滞する。それは家庭の寛ぎであつたり、書斎の思索であつたりするであろう。

私はたつた二畳ほどの小さな書斎を屋根裏にもっている。手をのばせば眼鏡も煙草も原稿用紙や本も、なんでも必要なものを簡単に取ることができる。この小さな部屋に入ると、不思議と気が落ちついて仕事のはかどるのである。ヨーロッパやアメリカにはよく屋根裏部屋というものがあつて、留学生時代にこんな小さな天井の低い部屋で暮らした経験のある人々も多いことであろう。屋根裏部屋は、大体において天井が斜めで低く、小さな出窓がちょこんとあいている。最上階に位置するせいか、外界から遮断されていてなんともいえない安心感がある。ベッドに横たわりながら斜めの天井に貼つてある写真やモットーを眺めていると安らぎを覚えるのである。こんな「小さな空間」には、自分の城としてのプライヴァシーや庇護性があるのである。

〔中略〕

さて、一九二〇年代になると、ヨーロッパでは近代建築運動が盛んになってきた。それまでは、建築の形式的な美しさや、左右対称性や、装飾性のようなものが重視されて、建築に本来そなわるべき機能性、合理性、快適性等々が二の次にされてきた。「建築は住むための機械である」というようなスローガンは多数の人々にうけいれられたし、ル・コルビュジェの提唱する新しい街造りの提案等は強く人々の心を打った。街路にへばりついた住居を取りはらつて、新しく「太陽、空間、緑」のスローガンのもとに、広々と隣棟間隔をとつた中層、高層アパート群の構成は、いかにも近代的であり、また人々に幸福な住いの環境をもたらすものとしてうけいれられた。わが国でも、過密で粗悪な木造住宅地を再編成して、不燃で快適な都市環境を創るのには、住宅公団の大規模団地のような中層や高層鉄筋コンクリートのアパートの建設が一つの解決策である一般的な考えられ、建築家もこぞつて隣棟間隔やオープン・スペースをできるだけたつぷりとりすることが効果的手法であると考えた。そしてこのような団地や、ニュー・タウンが世界中いたるところに出現してきた。たしかに「太陽、空間、緑」は確保されるし、土地の効率的な利用の点

でもすぐれているし、また、成功した実例も少なくないと考えられる。しかしながら、そこには何か足りないもの、実存主義者がいうような「人間はただ住むことよつてのみ存在する」というような、ほんとの意味での「住む」ことの充実感や定着感のようなものがいささか足らなかったのではないのかという反省も出はじめた。

「中略」

また、あの巨大な郊外の団地に接する駅に到着して、さてわが家に帰るとなると、同じような鉄筋コンクリートのアパートが、遙か遠くまで数えきれないほど立ち並んでいる。いつそ目的の建物が見えなくて、美しい自然の中を歩いているうちにそこに到着する方が、まだ慰めもつくというものである。人工的に中和された非連続の環境を歩いてゆくのはいかにも広漠としていて退屈である。そうかといって、在来
の低層住宅地にみられる連続性をもちこむことはできない。建物と建物との間の空間はたしかに自然ともつかず、人工ともつかず、中途半端な距離としてうつろである。このうつろな感じこそが、ここに住む人々にとって真の定着を嫌い一般的な仮寓かぐうとしての意識をもたせる理由の一つであると考えられる。「中略」

そんなときに、エーゲ海に浮ぶギリシャの島々やイタリア南部などの地中海沿岸の低層集合住宅を見ると、なんとも言えない共感と感銘をうけるのである。「中略」そして、家と家との間の思いがけない位置に、取り囲まれた小さな庭があつて、椅子や植木鉢が置いてある。その庭は斜面の関係から後側が高く護られ、前面が海に開かれたプライヴァシーのある小さな屋外空間である。こんな空間にぴったりはまりこんで、静かに音楽でも聴きながら、ワインでも飲んで、エーゲ海を見下ろすとき、いくたびかの外敵の侵略という危険をはらみながらも、この「小さな空間」を先祖代々まもりつづけてきたギリシャ人の定着感というものを、つくづく噛みしめるのである。これらの街は、いわゆる都市計画のマスター・プランや建築法規の規制によってできた街ではない。永年にわたる不文律の掟おきてによって自然発生的にできたものである。そこには計画都市には見られない人間の知恵が、協同防禦ほうぎょという連帯意識の枠の中で美しく結晶しているのである。

このように、内部の要因から自然発生的にできた街を「内的秩序」の街と呼び、都市のインフラストラクチャーをつくり外側から計画的につくつていった街を「外的秩序」と呼ぶならば、この「内的秩序」の街には、大都市に住む現代人が見失いがちな人間性や自然とのスキンシップのようなものをここに再発見して、いたく感銘するのである。

そんな所からか、わが国でも最近とみに低層集合住宅に関する関心や研究がふえてきた。「後略」

出題の意図、評価のポイント、受験生へのメッセージ

➤ 描 写

◆出題の意図

対象物の質感、量感および空間の把握について、鉛筆による明暗、色調、筆致といった基礎的な描写力はもとより、今回の出題では、個々の対象物の形態や特性を理解した上で、光が照射されることによって生じる現象や表情の変化を、積極的に観察して表現しようとする意欲と姿勢を問いました。そして、組み合わせによる対象物の関係性を表現する構成力と描写力を求めました。

◇評価のポイント

以下の項目に留意し、描写力を総合的に評価しました。

- ・光が照射したことによって生じる対象物の表情の変化について、能動的に観察ができているか。
- ・積極的な意欲をもって、対象物それぞれの特性を活かした構成、配置ができているか。
- ・配置した対象物同士を効果的に画面に収めることができているか。
- ・個々の対象物の形態や特性を理解した上で、立体感、固有色、素材感を描き分けることができているか。
- ・対象物同士の関係性、大きさ、間隔を的確に描くことができているか。
- ・鉛筆、紙、消しゴムなどの描画材を活かして描くことができているか。

■受験生へのメッセージ

今回、支給した4点、白い紙袋、植物の葉（オオタニワタリ）、麻紐、LEDライトのうち、答案用紙に描写するのは、LEDライト本体以外の3点でした。紙袋は、日常見慣れているものだと思いますが、LEDライトの光で内側から照らされることによって、紙の表面、継ぎ目、重なり、折り目などが普段とは別の表情へと変化します。加えて、紙袋は、置き方、口の開き方、折り曲げ方によって、形状や量感をコントロールすることができます。植物の葉は、自然物ならではの個性的な形態と、瑞々しい生命力を備えており、色、大きさ、質感に主張があります。麻紐は、規格品でありながら、その形や素材感は有機的な要素を持っていますし、紐を引き出すことによって変化を作ることにも可能です。

それぞれの素材、形状、色、質感の特性を理解し、さらに、光を介して生じる現象を能動的に観察して、自らが見出した対象物の魅力を描こうとする積極的な意欲と姿勢を求めました。規格品と自然物、対象物の色や大きさの対比や関係性を的確に捉え、同一平面上に存在していることを描写するためには、組み方や構成を練ることは大切です。そして、それぞれの対象物らしさを描き分けるよう注力すると同時に、目の前の情景として伝えるために画面全体を整えることが大切です。

➤ 色 彩

◆出題の意図

2つの異なる構成要素（色彩表現としての絵具・白黒の印刷物）の関係を計画的に考え、テーマに沿った画面構成ができているかを求めました。

また、与えられた印刷物から形を抽出することや、切り分けたものを構成することは、画面上に、コントロールできない部分を混入させることでもありました。それを、いかに色彩による配色や形によって、一つの画面にまとめていくか、という力が試されていたといえます。

◇評価のポイント

以下の項目に留意し、色彩表現力を総合的に評価しました。

- ・ 出題内容を的確に理解できているか。
- ・ 印刷物は切り分ける際、元画像が持つイメージを増幅するように再構成できているか。
- ・ 混色による表現と印刷物の濃淡の違いを活かして表現ができているか。
- ・ テーマの「きつ抗」を的確に表現できているか。
- ・ 限定された条件のなかで独自の表現を生み出すことができているか。
- ・ 限られた時間のなかで、計画的に解答できているか。

■受験生へのメッセージ

印刷物に写っていたものはありふれた風景でした。また、色彩の問題でありながらモノクロの写真を画面に入れ込むという今回の課題は、一見不自由と思えるような条件から豊かな表現をしようとする意欲や、不自由さを逆手に取る力が問われていたといえます。

今回の課題のように身の回りのものからイメージを膨らますことや、画面に変化を与えることで新たなアイデアを発見するという経験は、作品をつくる喜びの一つであると共に、これから表現活動をするための大きな力につながっていきます。

みなさんには普段から画材を使うことを楽しみ、そこから得られたものを自分の表現に結びつけていくことに挑戦して欲しいと思います。そして、色彩と言葉、または体験というものを結びつけていく経験を積むことで、より豊かな表現力を身につけていくください。

➤ 立 体

◆出題の意図

「深い溝」という言葉は、裂け目や隙間などの物理的な形状に加えて、心理的な隔たりについての連想もさせます。クッション素材は、曲げたり、組み上げたりなどの加工をすることで、陰影が生まれ、同時に、大きさや柔らかさ、奥行きなどを感じさせる立体の制作も可能になります。今回の問題では、それぞれが考えた「深い溝」と、与えられた素材の観察から得られる色や質感などの特性を結び付け、どのように深さを感じる

溝を立体として実現するかを問いました。（洞察力・知識・思考力・造形力）

◇評価のポイント

- ・思い描いた「深い溝」という意図に沿って、与えられた素材が活かされているか。
- ・構造や技術が実現したい形状に適しているか。
- ・構造を工夫し、耐久性のある立体が制作できているか。
- ・設定された条件の空間内に立体作品を効果的に配置・構成できているか。
- ・設定された時間内で計画的に制作できているか。

■受験生へのメッセージ

私たちは、目の前にある立体を構成している形や色、素材、質感などの要素からさまざまな印象やそこに込められているメッセージを受け取ります。与えられたクッション素材を手に取り、制作補助材料のタコ糸や粘着テープを用いて加工しながら、それらの性質を注意深く観察し、どのように各自が思い描いている「深い溝」を実現するのか、に期待しました。

➤ 小論文

◆出題の意図

今回の文章は、「小さい空間」という、一見、感覚的な言葉を導入のキーワードとしつつ、想像しやすい具体例を挙げながら、建築、街並み、都市景観や空間の質の在り方について提言を行うものです。四〇年以上前に執筆されたもので、実際にいまの私たちを取りまく都市や住環境の経験とは相違点もありますが、自身の直接経験に関わらず、文章が提示する情報や方向性を的確に読み解き、さらにその主張や提言を自身の知識や情報と積極的に関連づけて、自身の考えをまとめ、文章として論述する力を問いました。

◇評価のポイント

設問ごとに、以下の観点に沿って評価しました。

設問 1

- ・他者の書いた文章を読み、その内容を的確に理解することができるか
- ・その内容を要約として指定の文字数内で記述できているか

設問 2

- ・文章の内容を自身の知識や経験に基づいて発展的に応用し、論理的に表現できているか
- ・与えられた論点に対して、当該の文章における問題提起の前提を汲み取ったうえで、それを柔軟に応用し、関連させた観点から自身の考えがまとめられているか

設問 3

- ・問題文の内容を的確に理解したうえで、関連のある具体例や論点を導き出すことができるか

- ・「小さいもののなかに大きなものをよみとる」というやや抽象度の高いテーマを、自分はどうのように捉えて、どのような具体例に適用させたのか、分かりやすく説明できているか
- ・論理的に整合性があり、説得力に富む論述ができているか

■受験生へのメッセージ

総合芸術学科では、広く様々な芸術作品や創作活動、あるいは美術教育や社会における美術のあり方、さらには美学・芸術学的な理論などを学ぶことになります。芸術や創造行為自体が世の中の多様で広範な事象を対象にするものですから、必然的に、総合芸術学科で視野に入れ、考えるべき事柄も多岐にわたります。まずは普段から、興味の対象を狭く限定せず、色々な作品や文章に触れる経験を重ねてもらいたいと思います。

大学の研究の過程では、他者の主張をゆがめずに正しく理解すること、必要に応じて要点を再提示することなどが必要になります。そのためにも、的確に要約するというプロセスは重要です。要約の方法はひとつではありませんが、解答としての要約は、単独で読んでも問題なく元の文章の骨子が伝わるものである必要があります。慣れないうちは難しく感じるかもしれませんが、各段落の役割を意識しながら文章を読むことを心がけてみてください。

2問目、3問目では、自らが選択した具体例を活かし、説得力のある、あるいは魅力的な論を展開できた解答もあった一方で、「具体例を挙げ」という指示を汲みとらず、観念的な論述に終始した解答も見受けられました。また、自身が選択した具体例の話をするにあたり、それがどのように今問われている文脈と関連するのかということの説明が不十分な解答もありました。会話と同様、文章にも、その先には受け止める相手（読者）がいることを念頭に置き、その相手に対して十分な説明を尽くすことを心掛けると、分かりやすく行き届いた文章が書きやすいのではないかと思います。

2025 年 5 月

京都市立芸術大学 事務局 入試担当

〒600-8601 京都市下京区下之町 57-1

Tel 075-585-2005

Fax 075-585-2012

<https://www.kcua.ac.jp>